

大学生における想起された友人の特徴と 友人関係機能との関連

小 塩 真 司

問題と目的

青年期という人生の一時期における友人関係の重要性については、以前より多くの研究者が指摘している。たとえば、親から精神的に自立し、自己形成を行うことが青年期における課題のひとつとされるが、同様に同性・異性の友人との親密な関係を構築することも重要な課題とされる(Havighurst, 1953)。また、青年期における第二性徴などに伴う急激な心身の変化や親からの独立は不安や恐れを伴い、そのため青年は悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要になるという(岩永, 1991)。さらに、青年の人格形成を考える上でまず考えなければいけないのが「同性の友人」との関係であり、同性の友人との深い友情が育てられるか否かということが青年の心の成長を左右する大きな要因の1つであるとも言われる(宮下, 1995)。

青年期の友人関係には、どのような意味があるのだろうか。松井(1990)は、友人関係機能という観点から整理を試みている。それによると、青年期の友人関係機能として、緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する「安定化機能」、友人関係を営む中でスキルを学ぶ「社会的スキルの学習機能」、友人が自己の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」の3つが挙げられるという。また丹野・松井(2006)は、想起された友人がどのような存在であるかを自由記述で尋ね、記述内容を整理することで「相談・自己開示」「相互理解」など13の友人関係機能を見出している。さらに丹野(2006)は丹野・松井(2006)の整理や他の先行研究(Davis & Todd, 1985; 和田, 1993など)に基づき、「安心」「気楽さ」「相互理解」「重要性」「娯楽性」「尊敬・信頼」「類似性」「関係継続展望」「情緒的結びつき」「相談・自己開示」「支援性」「ライバル性」「肯定・受容」「学習・自己向上」「人生の重要な意味」「活動の共有」という16側面かならなる友人関係機能尺度を作成した。広義の友人関係機能とは、個人の内的適応を促進する友人関係の機能のこと(丹野・松井, 2006)であり、ある友人について認識された友人関係機能は、その友人から受けている肯定的な影響の内容を個人が認識していることを表す。これらの研究で示されているように、個人が友人関係から受ける肯定的な影響要因には多様な側面が含まれている。

さて、これまでに行われたいくつかの研究では、「親しい友人」として挙げられる1名の友人を分析対象とするのではなく、回答者が複数の友人を想起し、その友人間の特徴を比較している。

たとえば和田（2001）は、大学入学以前の友人（旧友人）と入学以降の友人（新友人）に注目した。そして、新友人よりも旧友人との間の関係満足感と心的疲労感が高く、旧友人の方が考え方への影響が大きいこと、また女性のほうが新友人に対して共行動を求めることなどを明らかにしている。また丹野（2007, 2008）は、これまでの友人関係に関する研究の多くが接触頻度の高い友人ばかりを取り上げてきたことを指摘し、ふだんからよく会う接触頻度の高い友人関係と、めったに会えないが親密な接触頻度の低い友人関係にわけて友人関係を捉える調査をおこなっている。そして、両友人関係において友人関係機能が異なっており、接触頻度の高い友人のほうが得られる支援が多く、一緒に何らかの活動をする機会が多いこと（丹野, 2007）、その一方で接触頻度の低い友人は安心感が強く、お互いのことを理解し合い、関係が長く継続する傾向にあること（丹野, 2007, 2008）を報告している。友人関係を捉える際には、調査対象者がもつ全般的な友人関係のあり方に焦点が当てられることが多い（たとえば岡田, 2007; 落合・佐藤, 1996）。それに対して、和田（2001）や丹野（2007, 2008）による試みは、一口に「友人」といってもその中には多様な存在があり、その内容によっては青年期の友人関係に重要な意味をもつことを示唆している。

ただし、和田（2001）や丹野（2007, 2008）による友人の種類の捉え方も、多様な友人関係を捉えるには十分とは言えない部分がある。たとえば、和田（2001）ではその友人と出会った時期が大学入学以前であるか以後であるか、丹野（2007, 2008）では接触頻度が低い友人であるか高い友人であるかといった側面から友人を類型化している。しかしながら、現実の生活においては、「旧友人」か「新友人」か、あるいは「接触頻度が低い友人」か「高い友人」か、といった類型化だけで捉えられない、多様な属性をもつ友人が存在すると考えられる。「旧友人—新友人」「接触頻度」は、友人の特徴を構成する1要素であり、この2点を考えるだけでも、旧友人で接触頻度が高い・低い友人、新友人で接触頻度が高い・低い友人を想定することができる。さらに多くの特徴を考えるのであれば、友人の特徴の1側面のみで類型化するのではなく、友人の多くの特徴をパラメータ化して捉えることが適切であると考えられる。そこで本研究では、友人の特徴をより多側面的に把握することを試みる。

また和田（2001）では、友人とのe-mailでのやりとりの頻度を調査したが、その交換回数が少なかったため分析からは除外されている。しかし近年では携帯電話の普及やインターネット利用者の増加などを背景として、旧来よりも多様な友人関係のあり方が存在すると予想される。現代の友人関係の多様性を捉えるには、ある特定の特徴のみに基づいた類型化ではなく、複数の友人の特徴を同時に捉えることが不可欠になると考えられる。複数の要因を同時に捉えることによって、その要因間の関連のあり方や他の変数への影響関係を検討することができるであろう。そこで本研究では想起された友人について、友人との物理的距離や接触頻度、連絡手段などをそれぞれの程度用いているかを測定する。そして得られた友人の特徴と友人関係機能との関連が

ら、先行研究との整合性を検討する。

友人関係に関しては、男女差も指摘されている。たとえば和田（1993）は、自己開示と友人関係に望むものを測定し、その性差と性役割による差を検討している。そして、男性よりも女性のほうが友人に対する自己開示量が多く、また女性性の性役割が友人への自己開示を促進することを示した。Caldwell & Peplau（1982）は、友人数や友人と過ごす時間は男女で差がみられないものの、女性は友人と感情の共有や会話を、男性は友人とともに活動する志向性があることを示している。和田（2001）や丹野（2007, 2008）においても、友人との物理的距離の意味や接触頻度の意味が男女で異なることが報告されていることから、本研究においても友人関係の個人差に影響を及ぼすひとつの要因として性別に注目する。

以上のことから、想起した友人の特徴を多面的に捉え、その特徴間の関連と友人関係機能との関連を男女差も含めながら検討することが、本研究の目的である。

方 法

調査参加者

調査参加者は愛知県内の大学生148名（男性87名、女性61名、平均年齢19.61歳）であった。

調査時期

調査は2008年1月中旬に行われた。

調査内容

友人の特徴 調査参加者に3名の友人を順次思い浮かべてもらい、その友人の特徴を尋ねる質問項目への回答を求めた。日常的に接している身近な友人だけを想起させるのではなく、可能な限り多様な友人を想起させるために、「あなたが現在仲のよい、または現在まで続いている同性の友人」を思い浮かべるように教示し、さらに「自分が結婚する時に式に呼びたい同性の友人」を例として記した（Appendix 参照）。なおこの例は、物理的距離の如何にかかわらず、調査対象者が関係性を重要と考える友人を想起させるために挙げたものである。そして、思い浮かべた友人のイニシャルを記述し、その後、思い浮かべた友人の特徴を回答した。友人の特徴に関しては、「友人と出会った時期」「会う頻度」「会うまでにかかる時間」「携帯電話でのメールの頻度」「PCやインターネット上での連絡頻度」⁽¹⁾「手紙のやりとりの頻度」「電話の頻度」「その友人を想起する頻度」について、週（月、年）におおよそ何回であるかを尋ねた。なお頻度をデータとして入力する際には、年間の回数に換算した。調査参加者は3名の友人それぞれについて1ページ、計3ページについて回答した。

友人関係機能尺度 調査参加者が思い浮かべた友人との関係において、どのような機能がかかわっているかを明らかにするために、丹野（2007）による友人関係機能尺度の16側面それぞれにおいて代表項目とされる16項目の文頭を「彼（彼女）は」というものに変更して使用した。丹野

(2006) による友人関係機能尺度は16側面98項目で構成されるが、本調査では調査参加者が想起した3名の友人それぞれに対して回答を求めていることから、回答時の負担を考慮して代表項目のみを簡易版として使用した。回答は丹野（2006）と同様に「あてはまらない（1）」から「あてはまる（5）」までの5件法で求めた。

結 果

想起された友人の特徴

148名の調査参加者全員が3名ずつの友人を想起し、回答をおこなったことから、最終的に444名の友人に関する回答を得た。以下では、この444名の友人に関する回答を分析対象とする。

想起された友人と出会った時期については、「乳幼児の時」が5名（1.1%；男性5，女性0），「保育・幼稚園の時」が26名（5.9%；男性13，女性13），「小学校低学年の時」が75名（16.9%；男性51，女性24），「小学校高学年の時」が24名（5.4%；男性16，女性8），「中学校の時」が73名（16.4%；男性40，女性33），「高校の時」が104名（23.4%；男性55，女性49），「大学の時」が137名（30.9%；男性81，女性56）であった。出会った時期と性別との関連について、比率の差を χ^2 検定で検討したところ、有意な差はみられなかった（ $\chi^2 = 9.56, df = 6, n.s.$ ）。

友人に会うための手段について、男女別の人数を Table 1 に示す。人数比を検討したところ、有意であった（ $\chi^2 = 17.43, df = 2, p < .001$ ）。残差分析を行ったところ、女性は男性よりも公共交通機関を用いる傾向にあり、男性は女性よりも徒歩の選択が有意に多いという結果が得られた。

Table 1 男女別の友人と会うための手段

会うための手段		性 別		計
		男 性	女 性	
公共交通機関	人数	107	98	205
	%	41.00	53.55	46.17
自動車	人数	78	62	140
	%	29.89	33.88	31.53
徒歩	人数	76	23	99
	%	29.12	12.57	22.30
計	人数	261	183	444
	%	100.00	100.00	100.00

友人と会うまでの時間や友人と会う頻度について、男女込みと男女別の要約統計量を Table 2 に示す。これらの数値については正規分布を大きく逸脱しているため、中央値や最頻値についても示した。Table 2の男女の差について、Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、会うまでにかかる時間（ $U = 20702.5, p < .05$; 男<女）、PC・インターネット頻度（ $U = 21086, p < .05$; 男<

女), 手紙の頻度 ($U = 18599, p < .001$; 女 < 男), 想起する頻度 ($U = 19704.5, p < .01$; 男 < 女) において有意な男女の順位差がみられた。

Table 2 友人の特徴の各指標についての要約統計量

	全 体			
	平均値	標準偏差	中央値	最頻値
会うまでにかかる時間 ¹⁾	67.52	77.76	40	10
会う頻度 ²⁾	88.77	103.78	30	234
携帯メール頻度	63.06	76.25	30	30
PC・インターネット頻度	30.68	75.06	0	0
手紙頻度	1.02	11.31	0	0
電話頻度	28.78	49.95	6.5	0
想起する頻度	97.30	98.74	52	130
〈男性〉				
会うまでにかかる時間	67.66	77.60	30	10
会う頻度	93.62	101.10	52	234
携帯メール頻度	63.91	77.77	30	30
PC・インターネット頻度	23.56	61.68	0	0
手紙頻度	1.19	14.59	0	0
電話頻度	31.79	49.83	6.5	0
想起する頻度	84.43	86.74	52	130
〈女性〉				
会うまでにかかる時間	67.31	78.21	40	60
会う頻度	81.84	107.39	12	234
携帯メール頻度	61.84	74.21	30	30
PC・インターネット頻度	40.84	90.02	0	0
手紙頻度	0.77	2.62	0	0
電話頻度	24.50	49.94	4.5	0
想起する頻度	115.66	111.39	54	130

1) 手段は関係なく、友人と会うまでの時間を分で換算

2) 頻度は年間で何回になるかに換算した

友人の特徴間の関連

Table 3に、想起された友人の特徴指標間の相関関係を示す。得点分布が正規分布から逸脱している指標があるため、ピアソンの積率相関係数とスピアマンの順位相関係数の双方を算出した。

Table 3に示されるように、ピアソンの積率相関係数とスピアマンの順位相関係数の方向性と有意か否かは、多くの変数のペアで一致していたが、部分的に異なっていた。出会った時期と会うまでにかかる時間、出会った時期と手紙を出す頻度、会う頻度と手紙の頻度、などのペアにおいて、両係数間に不一致が見られた。スピアマンの順位相関係数の結果に基づくと、次のよう

なことが言える。まず友人と出会った時期が最近であるほど、友人と会うまでに時間がかかり、会う頻度が多く、携帯電話のメール頻度も多く、PCやインターネットでのやりとりの頻度も多く、電話の頻度も多く、想起する頻度も多くなる一方で、手紙の頻度は少なくなることが示された。また、友人と会う頻度が多いほど携帯電話のメール頻度や電話の頻度、想起する頻度が多くなる一方で、手紙の頻度は少なくなることが示された。

Table 3 友人の特徴指標間の相関関係（スピアマンの順位相関係数）

		1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
1. 出会った時期 ¹⁾	<i>r</i>	—	.09	.55 ***	.23 ***	.12 *	.05	.12 *	.32 ***
	ρ	—	.35 ***	.60 ***	.32 ***	.10 *	-.17 **	.11 *	.35 ***
2. 会うまでにかかる時間 ²⁾	<i>r</i>		—	-.04	-.05	.05	-.02	-.15 **	-.02
	ρ		—	-.05	-.07	.03	-.08	-.16 **	.01
3. 会う頻度 ³⁾	<i>r</i>			—	.42 ***	.12 **	.10 *	.34 ***	.54 ***
	ρ			—	.58 ***	.09	-.19 ***	.36 ***	.56 ***
4. 携帯メール頻度	<i>r</i>				—	.27 ***	.05	.49 ***	.46 ***
	ρ				—	.22 ***	-.03	.55 ***	.55 ***
5. PC・インターネット頻度	<i>r</i>					—	-.02	.11 *	.31 ***
	ρ					—	.10 *	.20 ***	.20 ***
6. 手紙頻度	<i>r</i>						—	.08	.11 *
	ρ						—	-.07	.00
7. 電話頻度	<i>r</i>							—	.39 ***
	ρ							—	.37 ***
8. 想起する頻度	<i>r</i>								—
	ρ								—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

r: ピアソンの積率相関係数

ρ : スピアマンの順位相関係数

1) 乳幼児の時を1～大学の時を7として得点化

2) 手段は関係なく、その友人と会うことができるまでの時間を分で換算

3) 頻度は年間で何回になるかに換算

友人関係機能の因子分析

友人関係機能尺度簡易版の16項目を整理するために、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、6.37, 1.43, 1.18, 0.98, ……というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。最終的な因子パターンと因子間相関をTable 4に示す。

第1因子は6項目で構成されており、「彼（女）は、生涯の友となると思う」「彼（女）は、いわゆる「心の友」である」「彼（女）の性格は、よく理解している」など、想起された友人と調査参加者との間に、親密で深い関係が形成されていることを示唆する項目が高い負荷量を示して

いた。そこで、「親密性機能」因子と名付けた。第2因子に高い負荷量を示した項目は4項目あった。それは、「彼（女）と一緒にいると、なんとなく楽だ」「彼（女）との関係は、とても安心する」「彼（女）と一緒にいると楽しい」の4項目であり、その友人といると安心でき、楽しいという項目が高い負荷量を示していた。そこで第2因子を「安定化機能」因子と名付けた。第3因子に高い負荷量を示した項目は5項目あり、「彼（女）は、なくてはならない友人である」「彼（女）との関係は、自分を精神的に成長させてくれる」「彼（女）を尊敬している」など、想起した友人が調査参加者を支援し、成長させるという意味合いの項目が高い負荷量を示していた。そこで第3因子を、「支援機能」因子と名付けた。

Table 4の結果に沿って因子得点を算出することで、「親密性機能」得点、「安定化機能」得点、「支援機能」得点とした。男女差の検討を行ったところ、親密性機能（男性 $M = -.13$, $SD = .96$; 女性 $M = .18$, $SD = .89$; $t(442) = 3.43$, $p < .001$ ）、安定化機能（男性 $M = -.17$, $SD = .93$; 女性 $M = .24$, $SD = .89$; $t(442) = 4.61$, $p < .001$ ）、支援機能（男性 $M = -.17$, $SD = .90$; 女性 $M = .25$, $SD = .86$; $t(442) = 4.95$, $p < .001$ ）の3ついずれの機能得点においても男性より女性のほうが有意に高い得点を示した。

Table 4 友人関係機能の因子分析結果（主因子法・Promax 回転後の因子パターン）

機能名	項目内容	I	II	III
関係継続展望	彼（女）は、生涯の友となると思う	.84	.15	-.15
情緒的結びつき	彼（女）は、いわゆる「心の友」である	.68	.12	.12
相互理解	彼（女）の性格は、よく理解している	.61	-.09	-.08
人生の重要な意味	彼（女）は、自分の人生を語る上で欠かせない存在である	.60	-.05	.18
活動の共有	彼（女）とは、よく一緒に遊ぶ	.51	-.07	.09
肯定・受容	彼（女）は、自分の存在を受け入れてくれる	.42	.10	.16
気楽さ	彼（女）と一緒にいると、なんとなく楽だ	-.02	.89	-.18
安心	彼（女）との関係は、とても安心する	-.01	.86	-.09
娯楽性	彼（女）と一緒にいると、楽しい	.21	.44	.04
重要性	彼（女）は、なくてはならない友人である	.36	.44	.10
学習・自己向上	彼（女）との関係は、自分を精神的に成長させてくれる	.05	-.09	.73
尊敬・信頼	彼（女）を、尊敬している	-.27	.34	.64
支援性	彼（女）は、ふだんから私を助けてくれる	.07	.05	.60
相談・自己開示	彼（女）は、よい相談相手である	.01	.13	.59
ライバル性	彼（女）は、いわゆる「ライバル」のような存在である	.11	-.33	.45
類似性	彼（女）とは、考え方が似ている	.06	.22	.23
因子間相関		I	II	III
I		—	.70	.58
II			—	.65
III				—

友人関係機能と友人の特徴との関連

友人関係機能と友人の特徴との関連を Table 5に示す。ここでは、スピアマンの順位相関係数を示した。

男女込みの結果において親密性機能は、出会った時期と負の有意な相関、携帯電話のメール頻度、パソコンやインターネットでのやりとりの頻度、手紙の頻度、電話の頻度、想起する頻度と有意な正の相関を示していた。男女別に見ると、親密性機能と出会った時期の負の有意な相関が見られたのは女性のみであり、また男性のみで親密性機能と携帯電話メール頻度、想起する頻度との正の関連が見られた。

Table 5 友人関係機能と友人の特徴との関連（スピアマンの順位相関係数）

	親密性機能 ρ	安定化機能 ρ	支援機能 ρ
〈男女〉			
1. 出会った時期	-.13 **	.04	.10 *
2. 会うまでにかかる時間	-.09	.01	.06
3. 会う頻度	.01	.06	.15 **
4. 携帯メール頻度	.18 ***	.16 **	.23 ***
5. PC・インターネット頻度	.22 ***	.19 ***	.19 ***
6. 手紙頻度	.19 ***	.17 ***	.18 ***
7. 電話頻度	.27 ***	.20 ***	.21 ***
8. 想起する頻度	.27 ***	.35 ***	.39 ***
〈男性〉			
1. 出会った時期	-.11	.04	.07
2. 会うまでにかかる時間	-.07	-.01	.01
3. 会う頻度	.05	.10	.14 *
4. 携帯メール頻度	.24 ***	.18 **	.22 ***
5. PC・インターネット頻度	.19 **	.16 **	.15 *
6. 手紙頻度	.13 *	.11	.20 ***
7. 電話頻度	.33 ***	.22 ***	.20 ***
8. 想起する頻度	.36 ***	.41 ***	.41 ***
〈女性〉			
1. 出会った時期	-.17 *	.03	.13
2. 会うまでにかかる時間	-.11	.04	.11
3. 会う頻度	.01	.08	.23 ***
4. 携帯メール頻度	.08	.13	.23 ***
5. PC・インターネット頻度	.25 ***	.21 ***	.22 ***
6. 手紙頻度	.18 *	.13	.03
7. 電話頻度	.19 **	.18 *	.26 ***
8. 想起する頻度	.11	.21 **	.29 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

また安定化機能については、男女込みの結果において携帯電話のメール頻度、パソコンやインターネットでのやりとりの頻度、手紙の頻度、電話の頻度、想起する頻度と有意な正の相関を示した。男女別にみた場合には安定化機能と手紙の頻度との有意な関連は見られず、また女性では安定化機能と携帯電話のメール頻度とも有意な関連は見られなかった。

支援機能については、男女込みの結果において会うまでにかかる時間以外のすべての指標との間に正の有意な関連が見られたが、出会った時期との相関は低いものであった。男女別では特に女性において支援機能と手紙の頻度との関連が有意ではなかった。

友人の特徴が友人関係機能に及ぼす影響

友人の特徴を独立変数、友人関係機能を従属変数とした重回帰分析の結果を Table 6に示す。友人の特徴については正規分布から大きく逸脱するため、以下のようにダミー変数化した後に重回帰分析に用いた。出会った時期については大学以前を0、大学入学後を1とした。会うまでにかかる時間、会う頻度、携帯電話のメール頻度、電話の頻度、友人を想起する頻度については中央値よりも少なければ0、多ければ1とした。またパソコンやインターネットでのやりとりの頻度、手紙の頻度については、なしを0、ありを1とした。重回帰分析において多重共線性の影響を検討するために、独立変数の VIF (Variance Inflation Factor) を算出したところ、男女込みで1.07~2.04、男性で1.04~1.83、女性で1.11~2.78と許容範囲内に収まっており、問題はないと考えられた。

親密性機能に対しては、男女込みでは出会った時期が有意な負の影響、パソコンやインターネットでのやりとり、手紙のやりとり、電話の頻度、想起の頻度が低いながらも有意な正の影響を示した。男女別にみた場合には、男性では電話の頻度や想起頻度が親密性機能に正の影響を与えるのに対し、女性では出会った時期が負の影響、会う頻度やパソコンやインターネットでのやりとり、手紙のやりとりが正の影響を与えるといった違いがみられた。

安定化機能については、男女込みではパソコンやインターネットでのやりとり、手紙のやりとり、想起頻度が低いながらも有意な正の影響を与えていた。男女別にみた場合には、男性では想起頻度のみが正の有意な影響を与えていたのに対し、女性では出会った時期が負の、会うまでにかかる時間や会う頻度が正の有意な影響を与えていた。

支援機能に関しては、男女込みでは会うまでにかかる時間、パソコンやインターネットでのやりとり、手紙のやりとり、電話の頻度、想起頻度が低いながらも有意な影響を与えていた。男女別にみると、男性においては手紙のやりとりと想起頻度のみが正の影響を示し、女性においては会うまでにかかる時間とパソコンやインターネットでのやりとりのみが正の影響を示していた。

Table 6 友人関係機能に及ぼす友人特徴の影響

	親密性機能 β	安定化機能 β	支援機能 β
〈男女〉			
1. 出会った時期 ¹⁾	-.17 **	-.08	.01
2. 会うまでにかかる時間 ²⁾	.04	.08	.10 *
3. 会う頻度 ³⁾	-.02	-.03	-.02
4. 携帯メール頻度 ⁴⁾	.05	.08	.07
5. PC・インターネット ⁵⁾	.16 **	.11 *	.10 *
6. 手紙のやりとり ⁶⁾	.16 **	.13 **	.18 ***
7. 電話頻度 ⁷⁾	.17 **	.07	.11 *
8. 想起頻度 ⁸⁾	.12 *	.17 **	.20 ***
R^2	.14 ***	.09 ***	.14 ***
〈男性〉			
1. 出会った時期	-.10	.00	-.01
2. 会うまでにかかる時間	.01	.01	.04
3. 会う頻度	-.08	-.09	-.02
4. 携帯メール頻度	-.01	.05	.04
5. PC・インターネット頻度	.13 *	.11	.04
6. 手紙頻度	.09	.06	.19 **
7. 電話頻度	.25 ***	.11	.08
8. 想起する頻度	.22 ***	.25 ***	.30 ***
R^2	.18 ***	.12 ***	.17 ***
〈女性〉			
1. 出会った時期	-.37 **	-.33 **	-.10
2. 会うまでにかかる時間	.10	.21 **	.22 **
3. 会う頻度	.22 *	.26 *	.17
4. 携帯メール頻度	.13	.11	.10
5. PC・インターネット頻度	.23 **	.13	.17 *
6. 手紙頻度	.18 *	.12	.10
7. 電話頻度	.08	.06	.15
8. 想起する頻度	-.10	-.05	-.04
R^2	.15 **	.10 *	.13 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

1) 大学入学以前 = 0, 大学入学後 = 1

2), 3), 4), 7), 8) 中央値により低群 = 0, 高群 = 1

5), 6) なし = 0, あり = 1

考 察

想起された友人の特徴

本研究の目的は、大学生が3名の同性友人を想起した際に、各友人がどのような特徴を有して

いるかを検討すること、そしてその特徴が友人関係機能にどのようにかわるのかを検討することであった。

先に述べたように、和田（2001）は大学入学以前からの最も親しい友人（旧友人）と大学入学後に最も親しくなった友人（新友人）を1名ずつ挙げさせることで、その特徴を検討した。また丹野（2007, 2008）は調査対象者に、接触頻度の高い親密な友人1名と、接触頻度は低い親密な友人1名を挙げさせることで双方の友人関係を検討した。和田（2001）によって検討された旧友人と新友人という類型化は、本件研究では「出会った時期」の指標に相当し、丹野（2006, 2008）による接触頻度による友人の類型化は、本研究では「会う頻度」という指標に相当すると言える。本研究においてこれらは複数の指標の一部として扱われていることになり、この点で友人の特徴を多側面的に測定したことになる。

結果から、本研究で想起された同性の友人は、出会った時期が乳幼児期といういわゆる幼なじみの関係にある友人から、大学生以降に出会った最近の友人までの範囲を含むことが示された。また、会うことができるまでの物理的距離が非常に近い友人から、会うまで数時間かかる友人まで含まれており、1年間に1度も会わない友人から毎日のように会う友人まで含まれていた。このように、本研究の測定方法によって、非常に広い範囲の友人を挙げさせることにある程度成功したと言えるだろう。

男女差の検討結果からは、女性のほうが男性よりも友人と会うために公共交通機関を利用する割合が多く、友人と会うまでの時間も長く、PCやインターネットを介したやりとりの頻度が多く、手紙の頻度が少なく、友人を想起する頻度が多いという結果が得られた。想起した友人と出会った時期については有意な男女差はみられず、男女とも同じような時期に出会った友人を想起する傾向にあるものの、その友人との関係のあり方は異なっていることが示唆された。特に、携帯メールでのやりとりに男女差はみられない一方で、PCやインターネットでのやりとりの頻度は女性のほうが多いという結果は、女性においてSNS（Social Networking Service）を利用した友人とのやりとりが多くなっていることを示唆しているのかもしれない。ただし、本研究の結果のみからは、友人と知り合ったきっかけがSNSであるのか、またSNSを利用して友人とのやりとりを行なっているのかは明らかではない。この点については今後も検討していく必要があるだろう。

友人の特徴間の関連

本研究のような方法で想起した友人の特徴を調査することの利点のひとつは、友人の特徴として測定した指標間の関連を検討することが容易になるという点にある。

たとえば和田（2001）は、新旧友人との物理的距離と、その友人とすごす回数やすごす時間、電話の回数などとの関連を検討している。そして、旧友人よりも新友人との電話回数が多いこと、また男性において遠距離の友人よりも近距離の友人の方が、電話回数が多いことを報告している。

本研究においては、出会った時期と電話頻度との間に低い値ではあるが有意な正の相関、会うまでの時間と電話頻度とのあいだに低い値ではあるが有意な負の相関がみられた。この結果は、出会う時期が最近であり、かつ物理的距離が近い、いわば新友人（和田，2001）と電話をする頻度が多いことを示唆している。従って本研究の結果は、部分的に和田（2001）の結果にも符合すると言える。

本研究で用いた友人の想起方法は、先行研究では検討されていない友人の特徴間の関連を検討することも可能にしたと言える。たとえば直接友人と会うこと、携帯電話でのメール、PCやインターネットを介したやりとりの頻度、電話の頻度といった友人との連絡手段の頻度は、互いに正の関連を示していた。これは、想起されたある友人との間で、CMC（Computer-Mediated Communication）を含む多様な連絡手段がとられていることを示唆している。ただし、手紙でのやりとりの頻度については、他の連絡手段とあまり有意な関連を示さなかった。Table 2に示されたように、手紙の頻度は年間1回程度であり、他の連絡手段の頻度と比べても圧倒的に少ない。CMCは、他のコミュニケーションと比較して気軽に話しやすいと言われている（杉谷，2007；2009）ことから、CMCを介したやりとりは手紙よりも即時的で非形式的なものであり、友人とのやりとりにおいて利便性が高いことを示唆している。友人との連絡手段の多様性については、頻度だけではなくより詳細な検討が必要と考えられるため、今後も引き続き検討を行う必要があるだろう。

友人関係機能と友人の特徴の関連

本研究では、友人関係機能を簡易版の尺度によって測定し、親密性機能、安定化機能、支援機能という3つにまとめた。本研究で見いだされた3つの友人関係機能因子は、丹野（2007）よりも上位の、抽象的なレベルに位置するものであると考えることができる。丹野（2008）が示しているように、友人関係機能は互いに有意な正の相関関係にある。本研究においても3つの因子間相関は中程度以上であり、見いだされた3つの友人関係機能因子は相互に関連しあう関係にあると考えられる。

丹野（2007）では検討された16の友人関係機能のうち12機能において男性よりも女性のほうが高い得点を示しており、丹野（2008）でも9つの機能のうち8つで男性よりも女性のほうが有意に高い得点を示したことが報告されている。本研究においても、3つのさらにまとめられた友人関係機能いずれについても、男性より女性のほうが高得点であることが示されており、女性の友人関係機能の多さが再確認されたと言える。

丹野（2007）は、接触頻度と友人関係機能との関連を検討する中で、「安心」（本研究では第2因子）、「相互理解」「関係継続展望」（いずれも本研究では第1因子）において接触頻度の低い友人の方が高得点であり、「支援性」（本研究では第3因子）と「活動の共有」（本研究では第1因子）

については接触頻度の高い友人で高得点になることを明らかにしている。本研究で検討された順位相関の結果から、男女ともに支援機能のみが会う頻度と低い値ではあるが有意な関連を示していた。このことは、丹野（2007）の結果を部分的に支持するものであると言える。ただし、本研究における重要な知見は、友人関係機能に関連していたり、友人関係機能に影響をおよぼしたりする要因は、接触頻度だけではないという点にある。

男性の重回帰分析の結果を見ると、友人の特徴の中でいずれの友人関係機能にも共通して影響をおよぼす要因は、友人を想起する頻度であった。その一方で女性では、出会った時期が若い頃で会うまでに時間がかかり、かつ会う頻度やインターネット上でのやりとりが多いこと、つまり想起した友人が幼なじみなど古くからの友人で現在もよくやりとりをする関係にあることが、友人関係機能に影響するようであった。和田（1993）によると、男性よりも女性の方が友人に対する自己開示量が多く情動的で、相互依存적であるという。このことを考慮すると、女性の場合には実際に友人との間に相互に交流が成り立っていること、その一方で男性の場合には現実の交流が成立しているかどうかよりも、相手を友人という存在として意識することが、友人関係機能、すなわち友人の存在が内的適応に果たす役割を多く認識することに影響すると言えよう。ただし本研究では友人関係機能を簡易版の尺度によって抽象的に測定しているため、今後はより詳細な友人関係機能についても検討する必要がある。

今後の課題

本研究では、これまでの先行研究で「新友人か旧友人か」「接触頻度が低いか高いか」といったように二者択一的に捉えられてきた同性友人の特徴を多次的に捉え、友人のどのような特徴が友人関係の機能にかかわるのかを探索的に検討した。本研究で用いられた友人の特徴の把握方法は、複数次元の友人関係のあり方を同時に把握することを可能にするものである。特に、友人との関係のありかたが多様になる大学生以降、成人期や老年期にいたるまで、この手法を適用していくことが可能と言えるのではないだろうか。ただし、本研究で測定された友人の特徴は、数多くある指標のうちの一部にすぎない。他の特徴とその意義に関しても、今後は検討を重ねていく必要があるだろう。

また、本研究では友人を想起させる際に「あなたが現在仲のよい、または現在まで続いている同性の友人」を思い浮かべるように教示し、さらに「自分が結婚する時に式に呼びたい同性の友人」を例として挙げた。一般的に、結婚式に招待する友人は普段日常的に直接やり取りのある友人であるとは限らず、このような例示をすることによって多様な友人を想起させることができると考えられた。実際に結果に示されたように、物理的な距離や接触頻度について多様な友人が想起されたとは考えられるが、この例示によってかえって想起された友人が限定された可能性も残されている。適切な教示方法についても、今後は検討を重ねる必要があるだろう。

本研究では想起した友人に関する回答に注目しており、回答者自身がつ内的特性を尋ねていない。どのような特徴を持つ者の友人がどのような特徴を有しているのか、どのような友人関係を営む傾向にあるのかを明らかにすることが今後は必要となるだろう。この点については、回答者が自分自身の特徴を回答し、複数の友人を想起する。そして想起した友人の特徴を回答することでマルチレベル分析を適用することも可能となる。マルチレベル分析を適用することで、報告された友人の特徴が、個別の友人のものであるのか、あるいは報告者である個人に共通する特徴であるのか明らかにされるだろう。今後は調査手法をより洗練させるとともに、分析上の工夫も行っていく必要がある。

付記

本研究は、著者の指導の下で早河舞子が2009年に中部大学人文学部に提出した卒業研究のデータを、本人の承諾のもとで著者が再分析・再構成したものである。本論文に関する問い合わせは、すべて著者が受ける。

脚注

- (1) 厳密には、携帯電話を介した SNS (Social Networking Service) でのやりとりも存在するが、本研究では調査時のインターネット端末の状況をふまえ、大学生の使用頻度が高い携帯電話でのメールと、それ以外のインターネット上でのやりとりを分けて調査した。

文献

- Caldwell, M. A., & Peplau, L. A. (1982). Sex differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, 8, 721-732.
- Davis, K.E. & Todd, M. (1985). Assessing friendship: Prototypes, paradigm cases, and relationship description. In S. W. Duck & D. Palman (Eds.) *Understanding personal relationships*. London: Sage Publications. Pp.34-35.
- Havighurst, R.J. (1953). *Human development and education*. New York, Longmans, Green & Co.
- 岩永 誠 (1991). 友人・異性との関係 今泉信人・南博文 (編) 人生期間の中の青年心理学 北大路書房 Pp140-152.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp283-296.
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見 孝 (編) 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し—青年期— 金子書房 pp.155-184.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達変化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 杉谷陽子 (2007). メールはなぜ「話しやすい」のか? : CMC (Computer-Mediated Communication) における自己呈示効力感の上昇 社会心理学研究, 22, 234-244.
- 杉谷陽子 (2009). インターネットにおける自己呈示・自己開示 三浦麻子・森尾博昭・川浦康至 (編著) インターネット心理学のフロンティア—個人・集団・社会 誠信書房 pp.59-85.
- 丹野宏昭 (2007). 友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能 パーソナリティ研究, 16, 110-113.
- 丹野宏昭 (2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能 青年心理学研究, 20, 55-69.
- 丹野宏昭・松井 豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, 32, 21-30.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 和田 実 (2001). 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72, 186-194.

Appendix 友人の特徴を測定するフォーム

あなたの友人関係についてお尋ねします。

あなたが現在仲のよい、または現在まで関係が続いている同性の友人を3名思い浮かべてください。

(例) 自分が結婚する時に式に呼びたい同性の友人 など

その同性の友人3名について一人ずつ思い浮かべて○をつけてください。

1人目 イニシャル()

①その友人といつ出会いましたか？

(乳幼児, 保育・幼稚園, 小学校低学年, 小学校高学年, 中学校, 高校, 大学)の時。

②その友人とどのくらいの頻度で実際に会いますか？

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

③あなたの今住んでいる所からその友人の住んでいる所まで行くにかかる時間はどのくらいですか？

交通機関を利用	で 約 ○ 時間 ○ 分
車を利用	
徒歩	

④その友人とどのくらいの頻度(回数)で携帯のメールをしますか？

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

⑤その友人とどのくらいの頻度(回数)でPCやインターネット上のコミュニケーションツールでやり取りしますか？

(例)mixiやチャットなど

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

⑥その友人とどのくらいの頻度(回数)で手紙のやり取りをしますか？

(例)年賀状や暑中見舞いなど

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

⑦その友人とどのくらいの頻度(回数)で電話をしますか？

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

⑧その友人のことをどれくらいの頻度で思い浮かべますか？

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

(例) 0回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

週に1回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

週に2・3回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

週に4・5回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

週に6・7回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

月に1回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

月に2・3回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

月に4・5回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

月に6・7回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

年に1回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

年に2・3回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

年に4・5回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

年に6・7回の場合

週	0	回
月	1	
年	2~3	
	4~5	
	6~7	

※全ての質問に回答したかどうかを確認し、次のページに進んで下さい。

